

刊行にあたって

このたび『リウマチ診療のための関節エコー撮像法ガイドライン』が刊行されることとなったが、日本リウマチ学会としては喜ばしい限りである。

関節リウマチ (RA) の診療には「パラダイムシフト」とよばれる大きなうねりが押し寄せていることは周知の事実である。その理由は、メトトレキサートや生物学的製剤のようなきわめて有効性の高い薬剤が登場したからである。

しかし、忘れてはならないのは、RAの診断および治療法の決定のおおもとにあるのは関節所見を含む総合的疾患活動性の評価である。そして、その基本にあるのは関節の視診、触診などによる理学的診察である。しかし、この理学的診察なるものは「名人芸」ともいえるテクニックを要するものであり、きわめて主観的な要素が強く、しかも定量性にも再現性にも乏しい。この問題点を解決できるのは画像診断であるが、従来のX線検査は感度が悪く、X線を用いることから頻回には検査はできない。またMRIは汎用性がなく、しかも機器も検査費用も高価であるうえに、未だ関節検査としては十分に標準化されていない。

一方、超音波検査はすでに日常臨床に定着しており、多くの医療機関が超音波機器を有している。また、MRIと比較すると汎用性が高く、安価にかつ再現性高く、いつでもどこでも検査が行えるという利点を有している。プローブも関節用のものに取り換えれば関節エコーを実施することも可能となる。さらに、すでにヨーロッパでは、RAの早期診断のツールとして関節エコーを臨床現場で積極的に応用している。しかし、我が国のリウマチ診療では関節エコーの導入が遅れており、しかも撮像法が標準化されていない点が大きな問題であった。

日本リウマチ学会はこの問題に即応するために、2010年より関節リウマチ超音波標準化小委員会を立ち上げ、早くから関節エコーの重要性に着目していた小池隆夫教授（北海道大学大学院医学研究科内科学講座・第二内科）に委員長として指導的な役割を果たしていただいた。その結果、出来上がったのが本書である。本書は我が国の関節エコーの若き専門家の力を集大成して出来上がった力作である。その努力に対して深甚の敬意を表したい。

本年度から日本リウマチ支部集会では関節エコー講習会を開催し始めているが、そこでもこの本はまさに「バイブル」となることであろう。本書が我が国のリウマチ診療のブースターとなることを心より期待してやまない。

2011年2月

一般社団法人 日本リウマチ学会
理事長 宮坂信之